

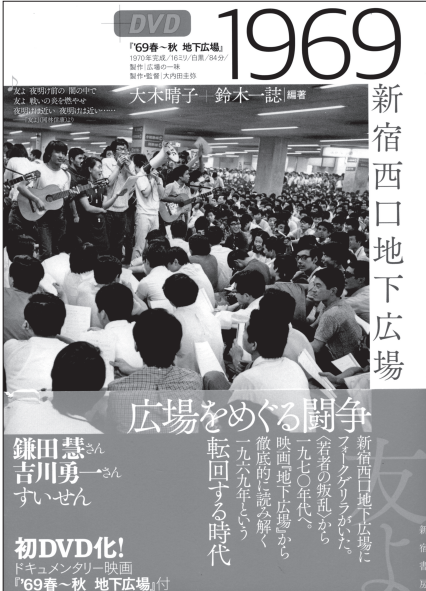


『1969 新宿西口地下広場』

大木晴子・鈴木一誌編著、新宿書房、
3200円＋税

もちろん表題は、同年2月から6月にかけての毎土曜の夕方、新宿西口地下広場を舞台に、東京フォークゲリラが、彼らの員数からすると無数といつてよい市民をまきこんで展開したフォーク集会を指すが、質量ともに濃厚な本だ。

冒頭見開きの写真は、同年1月、安田講堂に立てこもった学生めがけ、警官隊が放水するシーンで、これ以上ないプロローグとなっている。



ている。編者の一人鈴木のはじめに「地下の広場から見る1969年」は、わずか3ペー
ジながら、ベトナム戦争の位置づけ、ベ平連
の紹介をふくむ適切な導入部分であり、巻末
に置かれたやはり鈴木は「宙づりの思想」は、
私見では、最も鋭い「ベ平連論」となっている。
そのあいだに、最も重要な部分として、
「フォークゲリラは終わらない」(話し手：大木晴
子・同茂、聞き手：鈴木)という、本の半ば近
くを占めるインタビュがあるが、そこには、
多数の写真はもちろん、ゲリラの同志たち―
彼らも、当時もその後も多くの文章を書き残
している―の言葉・「ベ平連ニュース」の記
事ははじめ、長短無数の注記がつけられていて、
当時を知らぬ読者にも追体験を可能にしてい
る。前史ははじめ、よく自身も教ええられる事実
が多かった。

出たあ
の場所
で、
同じ毎
土曜の
夕方、
大木晴
子がパ
ネルを
もって
スタン
ディング
を始め
たこと
にも
よつて
いる。同
じ志の
人々も
加わり
、ある
意味で
、彼ら
は「広
場」を
奪還し
たとい
えよう。
これらの
文章と
ならん
で、読
者の臨
場感を
高めて
くれる
のは、
大内田
圭弥監
督『69
春―秋
地下広
場』(1
970年
、自主
製作、
16ミ
リ、白
黒、84
分)の
DVDが
本書に
添えら
れてい
ること
である。
映画は
山形国
際ドク
メンタ
リー映
画祭で
も上映
されて
いる。監
督が亡
くなる
前に、
このフ
ィルム
は大木
晴子に
託され
たとい
う。

しかも、ご丁寧に、全シナリオが本書のために採録しなおされ、掲載されている。フォークゲリラは、ふくれあがる群集と一緒に歌うように呼びかけただけでなく、小さな討論の輪をつくるようにとも呼びかけたことだが、見知らぬ市民同士の広場での討論の中身をいくつもDVDでは見ることが出来る。念のためいえば、大内田監督はフォークゲリラとの事前の了解なしに撮影したようで、真の

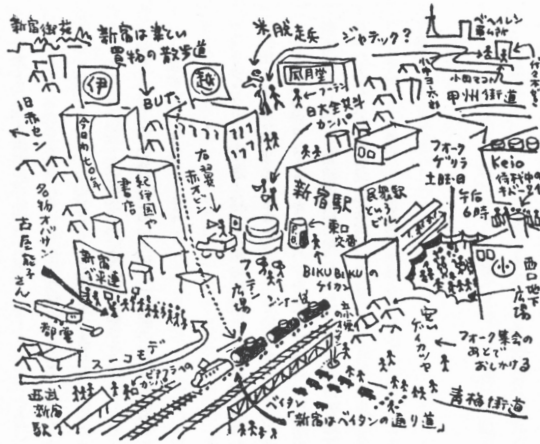


フォークゲリラ(左方向)を取り囲む群衆
1969.5.24

意味でのドキュメンタリー映画だった。書中には、大内田監督の詳細なフィルムグラフィイーも添えられている。

フォークミュージック論にはまったく無知だが、山本コウタローに『われらフォーク世代』という共著があることを本書で知った。よくに証言できるのは、コウタローがあの時期、米軍脱走兵の隠れ家で、ギターを弾いて一緒に歌っていた事実だ。その縁あって、脱走兵（ジャテックでのコード名：来栖）が戦後に再来日したときの歓迎パーティーで、他の参加者とともに、二人は何年ぶりかで再会・合唱したのであった。

そういえば、本書には、吉岡忍編著『フォーク・ゲリラとは何者か』（1970）のために、吉川勇一が書いた「1969年頃の新宿」というイラストが載っている。地下広場とフォーク集会を中心にして、当時阻止闘争の対象だった、航空燃料を積んだ立川行き米タンク車両とともに、風月堂の前には脱走兵とジャテックの姿も描かれている。「はじめに」で



1969年頃の新宿。イラスト：吉川勇一
吉岡忍編著『フォーク・ゲリラとは何者か』

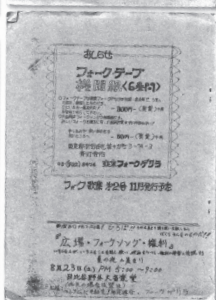
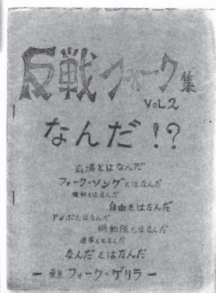
↓ガリ版刷、ホッチキス止めの手作り歌集



「表現の自由」はどこにあるのか？



←「西口広場裁判通信」10号
↓スタンディング中の大木晴子さん（右）



鈴木が強調したとおり、「フォークゲリラはくべ平運運動のひとつだった」のである。

高橋武智（たかはし・たけとも／本誌編集委員）

訂正とお詫び

以下の通り訂正し、お詫び申し上げます。

●143号

*吉岡忍「東日本大震災から3年、今を考える」

19ページ3段17行目（誤）「会津白虎隊の生き残りの千葉卓三郎」→（正）「戊辰戦争の生き残りの千葉卓三郎」

●前号144号

*前号（143号）記事の訂正

35ページ3段9行目（誤）「百石竿頭」→（正）「百尺竿頭」